

人一人ひとりがやっと通れる険しい山道をひたすら歩く親子。3日かけて120キロの道に行く。その途中にある村々に立ち寄り、郵便物を集配する。中国・湖南省の山岳地帯を舞台にした映画『山の郵便配達』、感動した。

交通手段がほとんどない山村に、長年郵便配達の仕事をしてきた初老の男がついに体力の限界を感じる。そして息子が父の仕事を引き継ぐ日がやってきた。映画は、父にとって最後の仕事、息子にとって最初の仕事となる2泊3日の旅を追いかける。

愛犬の「次男坊」もこの2人に同行する。今まで父と一緒にだったが、これからは息子と行動を共にすることになる。

息子は、郵便物がきっちり入った重いリュックを背負う。その後を無言でついていく父。長い間、父は仕事のためほとんど家にいなかった。そのせいで父子の絆は薄く、息子は父親を「お父さん」と呼んだことがなかった。だから、ただ黙々と歩く。

ある村に着いた。全盲の老婆に軍隊に行った孫からの手紙を渡す。仕送りが同封されている。老婆はお金を包んでいた白い紙を渡し、「手紙を読んでくれ」と頼む。父は読み上げる。「おばあさん、目はどうですか？腰の具合はどうですか？こちらは順調です。なかなか帰れないので困ったことがあったら郵便配達の人に頼んでください・・・」老婆は言う、「いつも同じだな」

父は息子に手紙を渡して、「続きはお前が読め」と言う。息子が紙を見る。白紙だった。息子は戸惑いながら何も書かれていない紙を見て、「一人暮らしは大変だね。よければ一緒に住みましょう・・・」と続けた

老婆と別れた後、息子は「ああやって何年も父はあの老婆に白紙の手紙を読んであげてきたんだ。そしてこれからは俺が読んであげなきゃいけないんだ」と考える。

そしてまた思う、「外に出た者は家を思う余裕はないが、家にいる者は外の家族を思うんだ」
息子は婆さんの手を握ったとき、母を想った。

川があった。向こう岸に渡る橋はない。息子は膝まで川に浸かって向こう岸まで渡り、リュックを下ろし、また戻ってきて父を背負い渡る。父は、息子に背負われながら、息子が小さかった頃、息子を肩車して夜祭りに行った日のことを思い出し、溢れてくる涙を必死で堪えた。

息子は、この冷たい川の水で父は膝を痛めたことを知る。そして、背負った父が郵便物より軽いことを知る

ずっと前、父が崖から落ちて村人に助けられたことがあったという。そんな話も村人から聞いた。父が母と出会ったのも郵便配達途中だった。

2泊3日の旅は父の生き様そのものだった。自分の知らない父親の人生があった。心に大きな隔たりを持っていた父と子は次第に心を通わせていく。

経済発展とはほど遠い山岳地帯の人たちの暮らし、一人っ子政策の中で愛犬に「次男坊」と名付けるユー
エマキ 都合に出た村人からの手紙を待たずに村に 現代中国が抱えるもう一つの「顔」

深く心にしみ渡るような感動を覚えます。今まさに季節は旅立ちの春～
出会いの春～別れの春真っ只中！

学生生活を終えられ社会に飛び出し仕事を始められた方、永く頑張った
仕事にピリオドを打たれた方などなど、いろんな家族で親子でドラマが
あったと思います。

二人の息子がいる私の父親～男としての感想は・・・
無言の背中ではいろんな事を伝え～教えられるようにならなく
ては、そうなれるように生き～仕事をしなくては！

木の芽萌え、生命輝く春は季節で言えば一年のスタート。
しっかり一日一日頑張って、顔晴ろう！！

ガンバ

